

研究報告

在宅看護実習の指導者が学生に期待する学び —第5次カリキュラム改正前のインタビュー調査より—

What Home Nursing Practicum Instructors Want Students to Learn: An Interview Survey Conducted Prior to the 5th Curriculum Revision

石村珠美¹⁾

Tamami Ishimura

キーワード：在宅看護実習、実習指導者、学生に期待する学び

Key words：Home nursing practicum, Practicum instructors, Learning expectations for students

要旨

本研究の目的は、在宅看護実習で学生を指導する訪問看護ステーションの指導者が、学生に期待する学びを明らかにすることである。訪問看護ステーションの実習指導者9名に対し半構造化面接を実施し、「指導者が学生に期待する学び」について質的記述的方法により分析した。本研究の結果、指導者が学生に期待する学びは、129コード抽出され、そこから、18サブカテゴリ、5カテゴリが生成された。5カテゴリは【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】【多様な療養者と生き方】【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】【やってみる・話してみる姿勢】であった。実習指導を担う訪問看護師は、学生に対して在宅看護の専門性の理解と同時に、在宅看護の視点をもった看護の学びを期待していた。さらに、生活の場で多様な療養者への可能な範囲での実践を通して、実習が良い経験となり、未来につながる興味・関心を期待していることがわかった。

I. はじめに

わが国の超高齢社会の到来とともに、国の政策として、療養の場を「医療機関から暮らしの場」へ移行しようとしている今日、看護師には、看護の対象者を患者としてだけでなく生活者にとらえ、さらに、医療機関と暮らしをつなげる関わりが重要となる。現在、看護師に求められている能力は「確かな看護スキル」「生活の質の視点」「地域マネジメント」と、地域で生活する対象へ適切な対応ができる人材の育成が求められている（日本看護協会，2015）。その期待を受けて、対象を「地域で生活する生活者」ととらえて看護を考えることができるよう、2022年度からは第5次となる看護師

等成所のカリキュラムが改訂された。これまでの統合分野としての位置づけであった在宅看護論が、地域・在宅看護論として低学年から学ぶように新たに設けられたのである（厚生労働省，2019a）。このような現状から、学生が在宅看護実習で、療養者の「生活の場」で看護を学ぶ意義は大きく、看護基礎教育で在宅看護教育の在り方を検討することは、重要な課題といえる。

本研究では、療養者の生活の場で行う看護を学ぶことが多い在宅看護実習の特性に着目した。病院などの施設実習では、教員が実習時間中、指導者とともに学生の指導を行う場合が多い。しかし、在宅看護実習の場合は、教員が学生と訪問看護の

1) 元札幌保健医療大学 Former Sapporo University of Health Sciences

対象者の生活の場へ同行せず、実践場面での指導の多くを指導者に依頼する場面があることが特徴的である。このような指導体制の中、新たなカリキュラム（以下、新カリキュラムと記載）では、在宅看護実習の対象学年が、従来通りの高学年の場合や低学年の場合など看護師等養成所による違いがあり、対象学生の変化に対する指導者の戸惑いが予測されるため、教員はこれまでとは異なる連携や協同を求められると考える。

これまでのカリキュラム（以降、旧カリキュラムと記載）における在宅看護実習の実習指導者に関する先行研究では、学生の受け入れ状況や指導者の困難と対処に関する研究（牛久保ら, 2015）（東海林・古瀬・森鍵・小林, 2019）、（酒井ら, 2015）、（渡部・一戸, 2011）など、報告は多い。また、アンケート調査の自由記載から、学生が理解を深め変化していくのを見るのは嬉しく感じるといった、学生の成長への期待をしていたこと（柴田・鈴木・町田, 2020）、実習指導の際に心がけていることとして、訪問看護師になるために必要な内容、看護職者になる者の責任や自覚の必要性といった内容を看護学生に求めていたこと（松下・多田・岡久・多田・藤井, 2013）などが報告されていた。さらに、指導についての認識として、訪問看護師は学生に対して、マニュアルに頼らず、利用者や連携についての情報提供や助言をしており、個々に合わせた指導をしている現状との報告があった（迫田・岡本, 2014）。このように、旧カリキュラムでは、実習指導の中で学生に求めていたことや、教員と指導者との連携や協同に対する課題や指導者の指導への考えなどが多く報告されていた。しかし、指導者が在宅看護実習で学生にどのような学びを期待して関わっているのか、といった視点でインタビュー調査より明らかにした先行研究は見当たらなかった。教員は、新カリキュラムに伴い更なる連携や協同が求められ、そのためには指導者の実習指導に対する思いや関わりの内容をあらためて理解することは重要であると考えた。

そこで、本研究では、旧カリキュラムのもとで在宅看護実習に関わる訪問看護ステーションの実

習指導者が抱く、実習で学生に期待する学びについて明らかにする。本研究の結果は、新カリキュラムにおいて在宅看護実習を経験する対象学生の特性が変化することが予測される中、実習指導者との連携・協同における教員の在り方、在宅看護実習の在り方を、指導者の視点から検討する基礎資料となる。

II. 研究目的

本研究の目的は、在宅看護実習で学生を指導する訪問看護ステーションの指導者が、看護学生に期待する学びを明らかにすることである。

III. 用語の定義

実習指導者：実習期間中に臨地（訪問看護ステーション）で同行訪問の実施、記録物の確認や指導、カンファレンスなどを通して学生指導に関わる者とする。

学び：本研究において「学び」とは、認知・情意・精神運動の3つの領域だけでなく、実習を通して興味や関心の醸成や能動的に学ぶ自己教育力（上村ら, 2016）の育成につながる経験も含める。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は質的記述的研究である。

2. 研究対象者

A市で学生を指導している訪問看護ステーションの指導者9名であった。選定条件は、複数の看護師等養成所の実習を受け入れている施設で、複数校の実習指導を経験していることとした。なお、研究者が所属する大学の実習を受け入れている施設は、研究者と日頃から学生指導に関するコミュニケーションを取っていたことから除外した。複数校とした理由は、学校により実習目標や実習方法が異なるなか、実習指導者が様々なレディネスの学生に関わった指導場面を想起しながら語れることを期待したためである。

3. データ収集期間

2018年12月～2019年3月であった。

4. データ収集方法

訪問看護ステーション管理者に電話で複数校の実習を受けていること、さらに複数校の学生指導の経験があることを確認し、管理者に対し研究の趣旨を伝え、実習指導者の紹介を得た。紹介された実習指導者に対し個別に日程を調整したうえで、インタビューを実施した。

調査方法は、インタビューガイドを用いた半構造的面接法であった。インタビュー内容は、実習指導歴や指導に関わった看護師等養成所の数、各養成所の実習方法、実習指導体制の他、「学生にどのような学びを期待しているか」「ぜひ学んでほしいと期待していることは何か」などについて日々の実習指導を想起しながら語ってもらった。インタビューは個室で実施し、1人約60分間で1回のインタビューとした。なお、インタビューは対象者に同意を得た後ICレコーダを用いて録音した。

5. データ分析方法

- 1) ICレコーダで録音したインタビューの音声データを逐語録に起こした。名前や場所などは特定できないように数字やアルファベットに置き換えた。
- 2) 逐語録を熟読し、語られた内容から「指導者が学生に期待する学び」に関連した内容を抽出しコード化を行った。
- 3) コード間の類似性や相違性を比較し類似しているものをまとめ、サブカテゴリを生成した。
- 4) 同様にサブカテゴリ間の比較を行い、類似しているものをまとめカテゴリを生成した。
- 5) 分析は質的研究に精通しているスーパーバイザーからの助言、ならびに、在宅看護の教員2名の他、質的研究での研究実績のある看護学研究者1名と繰り返し分析を検討し、確証性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の目的や方法、回答の自由、データ処理や管理方法、公表時のプライバシー保護、不参加や途中辞退においても不利益が生じないこと、研究結果は看護学術誌への投稿を行うことについて直接口頭と文書で説明を行い書面で同意を得た。本研究は札幌保健医療大学研究倫理審査の承認を得て実施した。

V. 結果

1. 研究対象者・実習体制の概要

研究対象者9名は全て異なる施設であった。対象者の平均年齢は41.78 (SD±6.65) 歳、指導者経験年数は平均9.11 (SD±6.68) 年で、実習中の業務としては、3名が実習指導者と管理者を兼務しており、他の6名は、実習指導者として主に指導に関わっていた。また、対象となった9名全員が1日3～6件の訪問を行いながら学生指導を行っていた。実習指導の状況は、大学や3年課程の看護師等養成所、准看護師進学コースを合わせると、平均3.56 (SD±0.84) 校の指導に関わっていた。実習形態は、大きく分けて看護過程を展開する実習と見学のみの実習であるが、詳細は、3日間の実習期間で看護師と同行して見学のみで実習を終える実習や、2週間の実習期間で受け持ち事例の看護展開、その他受け持ち事例以外の療養者宅への同行訪問を行う実習など、学校により異なっていた (表1)。

2. 在宅看護実習で指導者が学生に期待する学びの内容

分析の結果、指導者が学生に対して期待する学びは129コード抽出され、そこから18サブカテゴリ、5カテゴリが生成された (表2)。5カテゴリは【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】【多様な療養者と生き方】【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】【やってみる・話してみる姿勢】であった。

表1 研究対象者・実習体制の概要

| 指導者 | 年齢 | 指導経験 | 受け入れ校 | 実習形態 * (看護) = 看護過程 * (見学) = 見学のみ |
|-----|----|------|-----------------------------------|--|
| A | 56 | 10年 | 大学2校 | ・週2日を2週間(看護) ・週5日を2週間(看護) |
| B | 49 | 20年 | 大学3校 3年課程1校 | ・3日間のみ(見学) ・週4日を2週間(看護)2校 ・週4日を3週間(看護) |
| C | 57 | 20年 | 大学3校 3年課程1校 | ・3日間のみ(見学) ・週4日を2週間(看護)2校 ・週4日を3週間(看護) |
| D | 50 | 10年 | 大学3校 3年課程2校 | ・週5日を2週間(看護)3校 ・5日間のみ(看護) ・週2日を2週間(看護) |
| E | 48 | 3年 | 大学4校 | ・週5日を2週間(看護) ・5日間のみ(看護)3校 |
| F | 42 | 5年 | 大学1校 3年課程2校 准看護師進学 コース1校 | ・3日間のみ(見学) ・週4日を2週間(看護)2校 ・週3日を2週間(看護) |
| G | 38 | 3年 | 大学2校 3年課程1校 | ・3日間のみ(見学) ・週4日を2週間(看護) ・週5日を2週間(看護) |
| H | 50 | 6年 | 大学1校 3年課程2校 | ・週4日を2週間(看護)2校 ・週5日を2週間(看護) |
| I | 40 | 5年 | 大学3校 | ・週2日を2週間(看護) ・週5日を2週間(看護) ・3日間のみ(見学) |

なお、カテゴリを【 】,サブカテゴリを(),コードを[]で表す。

1) 【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】

このカテゴリは〈対象の思いを受け止める〉〈生活の場で実践する看護〉〈生活を支える訪問看護の専門性〉〈連携や協働で利用者の生活を支えている〉の4つのサブカテゴリから構成された。

指導者は、多様な事例を通して〈対象の思いを受け止める〉〈生活の場で実践する看護〉〈生活を支える訪問看護の専門性〉といった訪問看護師の特徴的な役割を学べるよう、〔看護師だけで対象を支えているわけではない〕〔多職種との良好な連携があって看護も成り立つ〕と〈連携や協働で利用者の生活を支えている〉ことを学生に伝え、【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】を知ってほしいと期待していた。

2) 【多様な療養者と生き方】

このカテゴリは〈多様な事例からの学び〉〈高齢

者への尊厳と理解〉〈支えられている療養者の姿〉〈療養者の生き方・生活の仕方〉の4つのサブカテゴリで構成された。

指導者は、〈多様な事例からの学び〉が得られることを意識して訪問先の選定を行っていた。また、〔家族や多職種の支援があって生活が成り立っていることを知ってほしい〕、〔介護度が高い独居の療養者でも支援があれば十分生活できる〕と、〈支えられている療養者の姿〉を通して【多様な療養者と生き方】が実感できることを期待していた。

3) 【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】

このカテゴリは〈療養者の暮らしへの関心〉〈療養者によって異なる環境〉〈病院でも在宅の視点は大事〉〈生活を含めて考えることは看護の基本〉の4つのサブカテゴリで構成された。

指導者は、〔意図的に情報収集をできるようにアンテナをたくさん立てて興味をもって訪問することが必要〕とアンテナといった言葉を使って学生が〈療養者の暮らしへの関心〉を持てるよう説明していた。また、〈生活を含めて考えることは看護の基本〉と気づけるよう〔病気ばかりに意識をおかずに個人を知ることは大切〕と話していた。生活体験が乏しい学生の生活背景を理解しつつ、訪問を通して【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】の必要性が理解できるよう期待していた。

4) 【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】

このカテゴリは〈在宅実習は良かったと思える一生の宝〉〈在宅の良さを知ってほしい〉〈将来思い出されるような実習〉〈興味を持ってもらうことが大事〉の4つのサブカテゴリで構成された。

指導者は〔訪問看護は看護の原点だし最高の看護ができることを知ってほしい〕〔いつか訪問看護師として働いてほしい〕と、学生に〈在宅看護の良さを知ってほしい〉と期待する思いを持っていた。未来の看護の担い手である学生が訪問看護の職に興味を持ち、いつか訪問看護師を自分の職

表2 在宅看護実習で指導者が学生に期待する学び

| カテゴリ | サブカテゴリ | コード (一部抜粋) | コード数 |
|------------------------|-----------------------|---|------|
| 思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割 | 対象の思いを受け止める | 対象の思いに目を向けてほしい / 対象の思いを受け止めることから看護は始まる / 思いを受け止めなければ信頼関係はできない | 6 |
| | 生活の場で実践する看護 | 生活を変えることがどんなに大変なことか分ってもらえたらいい / この人の生活を支えるために必要なことが看護につながる / 自宅だけが生活の場ではない | 6 |
| | 生活を支える訪問看護の専門性 | 訪問看護師の役割はすごく幅広い / 対象や家族の不安を見ることができるといい / 利用者さんの気持ちを大事に考えて生活に重きを置き考える / 疾患を見る看護の視点は生活に合わせて考える / 退院指導も在宅が分らないと不十分 | 10 |
| | 連携や協働で利用者を支えている | いろいろな職種との連携があってその人を支えている / ステーション内の連携にも興味を持つ / いろいろなサービスを活用することが大事 / 看護師だけで対象を支えているわけではない / 多職種との良好な連携があって看護も成り立つ | 10 |
| 多様な療養者と生き方 | 多様な事例からの学び | 驚く事例はたくさんいるので実際に見られると違うと思う / 生活困難事例を学んでほしい / 在宅生活が大変な療養者もいて学んでほしい | 5 |
| | 高齢者への尊厳と理解 | 認知症高齢者の混乱や失っていく寂しさを含めて一般的な高齢者であることを分かってほしい / 高齢者には面と向かって話さなくては理解できない / その人の生き方や生活の仕方を尊重することは大切 | 6 |
| | 支えられている療養者の姿 | 療養者は訪問看護があって支えられ生活している / 家族や多職種の支援があって生活が成り立っていることを知ってほしい / 介護度が高い独居の療養者でも支援があれば十分生活できる | 6 |
| | 療養者の生き方・生活の仕方 | 利用者の生き方、生活の仕方などが理解できて考えられること / 入退院を繰り返している人が、生活が変わって入院しなくなったときに醍醐味 | 4 |
| 対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活 | 療養者の暮らしへの関心 | 利用者さんの生活や家族のこの情報のうまく聞いてこられるように関心をもってほしい / 意図的に情報収集をできるようにアンテナをたくさん立てて興味をもって訪問することが必要 / 暮らしを見てこようと意識することが大事 | 6 |
| | 療養者によって異なる環境 | 退院しても再入院を引き起こしてしまうため自宅環境は重要 / 療養環境の工夫など気づいてほしい / 環境には人とのつきあいも入る / 同じ疾患や障害でもそれぞれ暮らしている環境は全然違う | 8 |
| | 病院でも在宅の視点は大事 | 個別性のある看護を考えるには家の情報は必要 / 病院で働いたときに自宅の状況に興味をもってほしい / 在宅の生活を知っているのと知らないのでは全然違う | 5 |
| | 生活を含めて考えることは看護の基本 | 病気ばかりに意識をおかず個人を知ることは大切 / 対象のベースは自宅だと分かってほしい / 病院にいるのが自分の生活の場ではなく非常に遠慮して治療を受けていることを分かってほしい / 生活がその人の歴史や信念といった個別性を表していることに気づいてほしい | 5 |
| 未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ | 在宅実習は良かったと思える一生の宝 | 在宅の実習は一生の宝になる / 自分が感じた感動みたいのを在宅看護実習で感じてほしい / 思い出深い実習になってくれたら嬉しい / 実習楽しいと思ってもらえれば、実習した価値があるのかなと思う / たくさんある看護の一つでもキャッチできてほしい / 学生にとって印象に残る利用者から学んでほしい | 12 |
| | 在宅看護の良さを知ってほしい | 在宅看護っていいなって思ってもらいたい / どんな人でも家に変えることができるのを分ってもらいたい / 在宅楽しいって言ってくれればそれでいい / 訪問看護は看護の原点だし最高の看護ができることを知ってほしい | 8 |
| | 将来思い出されるような実習 | 入院中の患者に在宅のことを思い出して退院指導などに役立ちたいと思えばいい / 働いたときに在宅を思い出してほしい / いつか訪問看護師として働いてほしい | 6 |
| | 興味を持ってもらうことが大事 | 気づけていたことや興味を持ってくれたことは大事 / 興味を持たないと深めることはできないと思う / いろいろなことに興味をもってもらいたい | 6 |
| やってみる・話してみる姿勢 | 対象とのコミュニケーションから看護は始まる | 利用者さんは話したいと思っているから怖がらないでほしい / 話さなくてもコミュニケーションは取れる / 自分たちがいるから安心してまずは話しかけてほしい / 利用者は学生を待っているから安心して関わってもらいたい | 10 |
| | 自分たちと一緒にやってみる | ただ見ているのではなく対象に触れてみてほしい / 実践までやってほしい / できるだけ緊張せず体験できるように声をかけるようにしているから実践してほしい / 自分たちがいるから安心して手を出してほしい | 10 |

業として選択できるよう【未来につながる在宅看護の興味や実習の楽しさ】を実習で経験することを期待していた。

5) 【やってみる・話してみる姿勢】

このカテゴリは〈対象とのコミュニケーションから看護は始まる〉〈自分たちと一緒にやってみる〉の2つのサブカテゴリで構成された。

訪問看護師は、[何でもやらせてくれる利用者を選んで]と訪問先の選定を工夫し、[できるだけ緊張せず体験できるように声をかけるようにしているから実践してほしい][自分たちがいるから安心して手を出してほしい]と、学生の緊張を和らげ、学生が安心して【やってみる・話してみる姿勢】が育成されることを期待していた。

VI. 考察

本研究では、実習指導者が「実習で学生にどのような学びを期待しているか」「ぜひ学んでほしいと期待していることは何か」について明らかにすることを目的にインタビューを実施した。その結果「期待する学び」とともに、「指導者自身が学生に期待することを学ばせるため、学生にどのように関わったのか」といった内容が語られていた。考察では、まず、在宅看護実習で実習指導者が学生に期待する学びの内容と指導者の関わりについて述べる。そのうえで、示唆された新カリキュラムに向けての課題について述べていく。

1. 在宅看護実習で実習指導者が学生に期待する学びの内容と指導者の関わりについて

在宅看護実習の場として多くを担う訪問看護ステーションでの実習では、訪問看護師と一緒に療養者宅を訪問し、疾患や障害があっても地域で生活している実際や、そこで実践されている多様な看護を学ぶ実習形態が多い。

実習指導を担当する訪問看護師は、さまざまな疾病や障害を抱えて生活している療養者への個別の看護について、【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】が理解できるよう、[対象の思い

に目を向けてほしい][対象の思いを受け止めることから看護は始まる][いろいろな職種との連携があってその人を支えている]と、訪問看護師の役割についてさまざまな視点から学生に伝えていた。また、[驚く事例はたくさんいるので実際に見られると違うと思う]や[病気ばかりに意識をおかずに個人を知ることは大切]と【多様な療養者と生き方】や【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】に気づけることを期待して関わっていた。このように、実習指導を担う訪問看護師は、学生に対して在宅看護の特徴や専門性に関する学び、在宅看護の視点をもった看護の学びを期待していた。

一方で、実習目的や目標にばかりに目を向けず、学生個々の学びや能力に合わせて対応し、学生にとって在宅看護実習が将来につながるような期待や、学生個々の成長を期待した関わりを行っていることが明らかとなった。訪問看護師は、【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】として、[在宅の実習は一生の宝になる][働いた時に在宅を思い出してほしい]と、学生が〈在宅実習は良かったと思える一生の宝〉と感じ、〈将来思い出されるような実習〉と、在宅看護実習が良い経験となることを期待し、自分の思いを語っていた。石川・内海(2016)は、「実習は学生にとって、看護師になるためのアイデンティティ形成への第一歩となり、『将来働きたい職業選択の機会になっている』ことが分かった。その実習をどれだけ有意義に過ごせるかは、学生にとってその後の看護職としての人生に大きな影響を及ぼすと考えられる。」と報告している。本研究の対象となった指導者が【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】を学生に期待しかかわっていたことは、まさに、実習を経験した学生にとって将来の職業選択の機会や、看護師としての人生に影響するきっかけとなったと考えられる。

さらに、指導者は、生活の場での看護実践を見せることだけでなく、学生に対して、[自分たちがいるから安心してまずは話しかけてほしい][一緒に対象に触れることをためらわないでほしい]と、

療養者との信頼関係のもと、療養者と学生両者の安全を自分たちが確保しつつ、学生の体験や気づきを積極的にうながす関わりを意識していた。新井(2015)は、臨地実習指導者の学生に対するロールモデル行動について、臨地実習指導者が看護実践を見せること、そして見せた看護実践を言葉で説明し補足していくことで、学生は看護実践能力を培っていくことを報告している。本研究の対象となった在宅看護実習の指導者は、療養者との関わりで看護の実践を見せ、説明するといった新井(2015)によるロールモデル行動を示しつつ、【やってみる・話してみる姿勢】という実習に対する姿勢が養われることへの期待を込めて行動していたと考えられた。

在宅看護実習で実習指導者が学生に期待する学びの内容として、在宅看護の特徴や専門性に関する学び、在宅看護の視点をもった看護の学びを期待する一方で、学生個々の学びや能力に合わせて対応し、学生にとって在宅看護実習が将来につながるような期待や、学生個々の成長を期待した関わりを行っていることが明らかとなった。

2. 新カリキュラムに向けての課題

新カリキュラムでは基礎看護学実習を終えたばかりの学生が在宅看護実習に臨むような進捗でカリキュラムが改訂された。そのため、在宅看護実習の対象学年が、従来通りの高学年の場合や低学年の場合など看護師等養成所による違いがあり、対象学生の変化に対する指導者の戸惑いが懸念される。特に低学年の場合は対象者の疾患や障害の理解が進んでいない、また、他領域での実習を経験していない場合が多いため指導の難しさも考えられる。しかし、在宅看護の指導者へのインタビュー調査から見出された【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】【多様な療養者と生き方】といった在宅看護の特性は、看護基礎教育で求められる、学年を問わず学ぶべき重要な視点である。それに加え【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】については、療養者の「生活」や「姿」をまずは知ってほしいという指導者の思いが多く

語られていた。この【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】といった期待する学びは、看護の対象を「生活者」としてとらえ、入院治療が必要となった時は病院で、地域に暮らしている時には地域で看護を受ける、そのような社会のしくみづくりが地域包括ケアシステム等の構築につながる(厚生労働省, 2019b)との、新カリキュラムのねらいと一致する。このように、新カリキュラムに伴い低学年のうちに在宅看護実習を経験する場合、学生は病院実習で受け持ち患者の「生活」を把握したうえで看護を考えることが基盤になり、さらには、地域包括ケアシステムの姿を思い浮かべながら、病院を退院することが患者のゴールではないことを実感できる機会になると考える。

指導者は実習を通して、生活を含めた観察で対象を知ることの理解だけでなく、学生が在宅看護に興味や関心を持つこと、さらには学生が実習に楽しさや手ごたえを実感し能動的に学ぶ自己教育力(上村ら, 2016)の向上にも期待し関わっていた。指導者が学生に期待する学びとして見いだされた【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】【やってみる・話してみる姿勢】は、生活の場で可能な範囲での実践や多様な療養者との関わり、コミュニケーションを通して、学生の自己教育力の向上を期待していることがわかった。また、その学びの期待の背景には、指導者たちが訪問先の選定や実践の際の工夫といった、調整があったことが明らかとなった。松下・菱田(2022)は、実習指導者の「やりがい」の創出について、学生からの反応が重要であり、学生からの反応によって自らの実習指導のやりがいを生み出す、また低下、消失させる、と報告している。本研究の対象となった指導者は、[自分が感じた感動みたいのを在宅看護実習で感じてほしい][思い出深い実習になってくれたら嬉しい][実習楽しいと思ってもらえれば、実習した価値があるのかなと思う]と話しており、自分たちが感じた在宅看護への思いを伝えることで[いつか訪問看護師として働いてほしい]と〈将来思いだされるような実習〉となることを期待し関わっていた。このように、将

来につながる実習になることを期待して関わることで、在宅看護実習における指導者の「やりがい」につながっているのではないかと推察できる。さらに、看護学生の学習意欲の向上について、中吉らは(中吉・高瀬・二井谷・今井・藤原, 2021)、看護学生の学習自体への興味関心が学習の動機づけとなっていると報告している。実習指導者の学生への関わりは、担当する学年にかかわらず、在宅で実習して「楽しかった」「やってみて良かった」というポジティブな感情として学生に残り、学習意欲の向上につながると考えられる。秋葉ら(秋葉・柿崎・松島, 2022)は、学生の実習意欲に影響する要因として、実習しやすい指導体制や学生に応じた指導、臨地実習ならではの経験などと報告している。本研究の対象となった指導者は、学生の緊張を取り除くように関わり、また、訪問先の工夫をするなど環境を整えていた。このような環境や体制での実習は、学生の学習意欲の向上に影響していたと考えられる。

このように、指導者が学生に対し未来につながる興味や自己教育力の向上を期待し指導することで、指導者自身のやりがいにつながり、さらに、指導者の学生に対する思いは、学生の学習意欲の向上につながると考えられた。しかし、本調査の結果は旧カリキュラム下でのインタビュー調査である。新カリキュラムにおいても、学生を受け入れた指導者のやりがいや指導に対する思いが継続されること、また、実習を経験した学生にとっても看護の対象は「生活者」であることが実感でき、将来の看護につながる実習となることが望まれる。そのため教員は、事前に指導者に対し新カリキュラムについて説明し理解を深めてもらうよう連携を図ること、実習目標を基盤とし学生のレディネスに応じて指導者との連携・協同、指導を工夫することの必要性が今後の課題として示唆された。

本研究の結果をふまえ、在宅看護実習において指導者との連携や調整を意識して取り組み、今後は、新カリキュラムにおいて運用された在宅看護実習が指導者や学生に与える影響をあらためて調査し、検討することが重要である。

Ⅶ. 結論

1. 本研究の結果、在宅看護実習を担う実習指導者が学生に期待する学びは、【思いを受け止め生活を支える訪問看護師の役割】【多様な療養者と生き方】【対象を知るために必要な療養者の暮らしや生活】【未来につながる在宅看護への興味や実習の楽しさ】【やってみる・話してみる姿勢】であった。
2. 実習指導を担う訪問看護師は、学生に対して在宅看護の専門性の理解や在宅看護の視点をもった看護の学びを期待しているとともに、学生個々の学びや能力に合わせて対応し、学生の成長を支援していることが明らかとなった。
3. 実習指導を担う訪問看護師は、生活の場で多様な療養者への可能な範囲での実践を通して、実習が良い経験となり、未来につながる興味・関心が高まることを期待していることがわかった。
4. 新カリキュラムにおいても、指導者のやりがいや指導に対する思いが継続されるよう、また、学生にとっても将来の看護につながる実習となるよう、事前に指導者に対し新カリキュラムについての理解を深めてもらうよう連携を図ることの必要性が示唆された。

Ⅷ. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、特定の地域での訪問看護ステーションの実習指導者へのインタビュー調査である。地域特性や受け入れの学校の特徴などは本分析時には検討しておらず、一般化には至らない。

今後は、広範囲の地域や看護師等養成所の特徴なども検討しながら、新カリキュラムになった学生を受け入れた指導者へのインタビュー調査を実施していき、新カリキュラムにおいて運用された在宅看護実習が指導者に与える影響を検討していくことが課題である。

謝辞

本研究に取り組むにあたり、研究の趣旨をご理解いただき、インタビュー調査にご協力ください

ました訪問看護師の皆様に深謝いたします。

本研究の一部は第9回在宅看護学会（2019）で発表している。

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない。

文献

秋葉由佳, 柿崎はるな, 松島正起. (2022). 学生の学習意欲に影響する要因に関する文献検討, 日本ヒューマンケア科学会誌, 15 (1), 2-13.

新井紗樹子. (2015). 臨地実習指導者による看護実践のロールモデル行動, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 11 (1), 19-26.

石川恵子, 内海桃絵. (2016). 看護学生における臨地実習へのモチベーション, 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 健康科学, 11, 11-16.

上村千鶴, 高瀬美由紀, 川元美津子. (2016). 看護師による学習行動と看護実践能力との関連性, 日職災医学会誌, 64 (2), 88-92.

厚生労働省. (2019a). 看護基礎教育検討会報告書.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (閲覧日 2023年4月28日)

厚生労働省. (2019b). カリキュラム編成ガイドライン&地域・在宅看護論の教育内容.
http://www.nihonkango.org/report/pdf/report_200603.pdf. (閲覧日 2023年4月28日)

松下恭子, 多田敏子, 岡久玲子, 多田美由貴, 藤井智恵子. (2013). 看護学生に対する訪問看護師の実習指導の現状と指導についての意識, The Journal of Nursing Investigation, 12 (1), 36-43.

松下由美子, 菱田知代. (2022). 在宅看護学実習における実習指導者の「やりがい」の創出, 日本看護研究学会誌, 46 (1), 41-50.

中吉陽子, 高瀬美由紀, 二井谷真由美, 今井多樹子, 藤原みのり. (2021). 学習観点による学習意欲を促進させる動機づけ因子—混合研究法を用いて—, 安田女子大学紀要, 49, 337-346.

日本看護協会. (2015). 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョンいのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護.

酒井禎子, 中澤紀代子, 石田和子, 飯吉令枝, 加賀美亜矢子, 山田真衣, …, 櫻井信人. (2015). 看護学実習指導者が感じている指導上の困難と学習ニーズ, 新潟県立看護大学紀要, 4, 12-16.

迫田智子, 岡本美千代. (2014). 実習指導者として訪問看護師が捉えた在宅看護実習の現状と取り組み, 第44回日本看護協会論文集 地域看護, 188-191.

柴田滋子, 鈴木美和, 町田貴絵. (2020). 訪問看護ステーションでの実習における実習指導者と教員との連携の実際と課題, 日本地域看護学会誌, 23 (1), 52-58.

東海林美幸, 古瀬みどり, 森鍵祐子, 小林淳子. (2019). 在宅看護実習で訪問看護師が感じる実習指導上の困難とその対処, 日本看護研究学会雑誌, 42 (4), 819-828.

牛久保美津子, 飯田苗恵, 小笠原映子, 田村直子, 斎藤利恵子, 棚橋さつき. (2015). 訪問看護ステーションにおける訪問看護実習受け入れに関する状況, THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL, 65, 45-52.

Abstract

This study aimed to identify what instructors from home-visit nursing stations want students to learn through their home nursing practicums. We conducted semi-structured interviews with nine practicum instructors from home-visit nursing stations and then analyzed what they wanted their students to learn using qualitative and descriptive methods. Analysis of what instructors wanted students to learn produced 131 codes, 18 subcategories, and the following 5 categories: “the role of a home-visit nurse as someone who accepts patients’ feelings and supports their daily lives,” “diverse patients and ways of living,” “information on patients’ daily lives and activities that is necessary for nursing,” “an enjoyment of practicums and an interest in home nursing that will persist into the future,” and “a try-it-and-see attitude.” Home-visit nurses responsible for practicum instruction wanted students to gain an understanding of the specialty of home nursing, as well as to learn nursing from a home nursing perspective. Furthermore, through as much practice as possible in everyday settings with diverse patients, instructors hoped that students would gain good practicum experience and develop curiosity and interests that could be carried forward.